

Towards a More Honest World: An Integrated Empirical Study to Elucidate the Effects of Environmental Factors on Dishonest Behaviors

劉, 歆緒

<https://hdl.handle.net/2324/7329399>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (心理学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 劉 歆緒

論 文 名 : Towards a More Honest World: An Integrated Empirical Study to Elucidate the Effects of Environmental Factors on Dishonest Behaviors (より誠実な世界へ ―環境要因が不正行為に及ぼす影響を解明する統合的実証研究―)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

不正行為の頻発はさまざまな場面で甚大な影響を及ぼしている。これまでの心理学研究は、人格、生理、社会認知などの視点から、その生起要因や内的なメカニズムの解明に努めてきた。しかし、不正行為が生起するメカニズムの全貌はまだ明らかにされていない。また、関連する研究知見は各分野に散逸して統合されておらず、単一要因が不正行為に与える影響を検討するものが支配的である。本研究では、複数の環境要因をモデル化し、これらの要因が不正行為に与える影響を探索するとともに、注目すべき要因を特定した。続いて、認知心理学の知見と環境心理学の視点を統合し、実験心理学の手法を用いて、不正行為における複数の要因の効果を検証し、その内的なメカニズムを解明した。

第一章では、心理学および関連分野における不正行為に関する文献をレビューした。まず、倫理学・哲学の観点から不正行為を論じた。次に、経済学や犯罪学における不正行為の実例である、詐欺に関する研究を紹介した。そして、社会、人格、生理、教育心理学などの分野にわたって、不正行為に関連する心理学的研究を概説した。また、現在、心理学における不正行為に関わる主流理論を要約し、不正行為を検知するための実験的パラダイムをまとめた。これにより、第一章はこれまでの不正行為に関する知識を包括的に整理し、本研究の基盤を築いた。

第二章は先行研究の知見を統合し、不正行為に影響を与える可能性のある要因を推論した。実験 1 では、これらの環境要因と不正行為を表す指標を収集した。そして、探索的グラフ分析 (EGA) とベイジアンネットワーク (BN) を用いてモデル化し、環境要因が不正行為に影響する可能性を分析した。相互情報量を算出した結果、環境要因の不正行為への影響は顕著とは言い難く、環境を調整することのみで全部の不正行為を抑制することは困難であることが示唆された。しかし、一部の環境要因 (特に環境快適性と個人的知覚 (ECPP) に関連する要因) の効果は無視できない。加えて、実験 1 において、心理ネットワーク (PN) を用いて環境要因の特性が不正と誠実の発生間で異なるかどうかを比較した。その結果、モデルの視覚的差異と中心性指標から、誠実と不正に関連する環境特性は異なっており、環境要因が不正行為に影響を与えていることが示された。また、中心性指標の結果から、ストレスと快適さに関連する環境要因が不正行為の生起に重要であることが示された。以上のことから、第二章では、不正行為に影響しうる具体的な要因を特定し、その後の実験の方向性を示した。

第三章では、明るさに焦点を当て、それが不正行為に及ぼす影響を検証し、そのメカニズムを解明するための一連の実験を行った。まず、実験 2 では暗さが不正行為を促進することが明らかになった。そのメカニズムを解明するため、4 つの実験を通じて、(暗さによる) 課題結果の曖昧さが不

正行為を促進するかを検討した。実験 3 では、暗さが不正行為に与える影響は、課題結果の曖昧さを無くした場合に軽減されることが示された。その後の 3 つの実験では、視覚マスキング (実験 4)、刺激の外観操作 (実験 5)、と重量操作 (実験 6) といった様々な方法を用いて、課題結果の曖昧さが不正行為に与える影響を評価した。これらの実験結果を総合すると、課題結果の曖昧さが不正行為に対して一貫して有意な効果をもたらすとは限らないが、実験 6 で課題結果の曖昧さが不正行為を促進する明確な証拠が得られた。

第四章では、Liu (2021) にて報告された 2 つの白黒メタファーが不正行為に与える影響を検討する実験をレビューし、拡張的に考察した。これらの実験では、白黒メタファーが不正行為に対して有意な効果を示さなかった。本章では、観察された結果を説明しうる理由を特定するために、これらの実験のプロセスを綿密に解剖し、白黒メタファーが依然として不正行為に影響を与える可能性があるかどうかを議論した。その結果、メタファーの提示方法、曝露の期間、外部報酬システムなどの要因が元実験の結果に作用した可能性があることが明らかになった。このため、メタファーが不正行為に影響する可能性は残っており、さらなる研究が必要である。

第五章では、タイムプレッシャーが不正行為に及ぼす影響について取り扱った。このテーマは心理学や経済学の分野で長年議論されてきたが、十分なコンセンサスは得られていない。Liu (2021) はタイムプレッシャーが不正行為を促進すると報告したが、これは一部の先行研究の結論と矛盾していた。そこで、本研究の実験 7 は参加者が取得できる報酬を操作し、これらの矛盾した結論の統合を目指した。その結果、不正行為の生起にタイムプレッシャーと報酬が相互作用するという仮説は支持されなかったが、不正行為に対する報酬の効果自体は認められた。

第六章では、各実験の結果を要約し、本研究の結果に基づいて、期待効用理論、自己概念維持理論、認知的不協和理論と道徳的離脱理論など不正行為に関する理論について検討し、拡張させた。さらに、不正行為とは何か、なぜヒトは不正行為を犯すのか、環境は不正に対して影響を及ぼし得るのかなどの問題に対して、統合的な考察を行った。

まとめると、本研究は、これまで未解明であった多数の環境要因が不正行為に与える影響に焦点を当て、新たな洞察と知見を提供した。また、本研究では、数理的手法 (BBN と PN) を導入し、不正行為に影響を与える可能性のある環境要因を探索し、実験を通じてこれらの要因の効果を検証し、その内的なメカニズムの一端を解明した。7 つの実験を行い、3 つの先行実験に関する議論を拡張することで、理論的には、文献のギャップを埋め、既存の理論を検証・拡張し、現在の知識の枠組みを補足し、さらに実践的には、実生活における不正行為を減らすための有効なアプローチを提案した。